

2022年 第49号

みやた

発行所 医療法人相生会 宮田病院
〒823-0003 宮若市本城1 636
TEL0949-32-3000
FAX0949-32-2997
発行日 令和4年 5月 20日
発行人 広報編集委員 NO.49



TIMES



Miyata HP

<http://www.lta-med.com/miyata-hospital/>



宮田病院 ひよこ保育園 第28回卒園式 令和4年3月26日

CONTENTS

☆愛される病院をめざして
☆副院長就任のご挨拶
☆最新鋭のマンモグラフィ装置を
導入しました!!

☆当院での乳房検査はマンモグラフィと
超音波の併用を推奨しています!!
☆新人職員のご紹介(1)～(3)

◆ 愛される病院をめざして ◆

私は外科医となって今年で49年目となります。宮田病院に着任して27年が経過しましたので医師として半分以上の時間をこの宮田病院で費やしてきたこととなります。

臨床医として存在感のある人間になって、社会貢献ができれば、納得できる人生を送ることができるのではないかと考え、医師個人としての実力を高め、外科医としての仕事のできる環境（物理的環境と人的環境）を持ちたいと願ってきました。たとえ小さな部隊でも、気の利いた効率的な部隊を指揮して、納得できる仕事をしたいと願ってきました。

そのために、大学を卒業してあちこちの病院を見て回りました。米国での2年間は見聞を広める程度の成果しか得られませんでした。現在の医療の限界や、世界の流れ、さらに東洋的価値観の独自性と日本人としての生き方を再認識させられました。

縁あって44歳で宮田病院での仕事を始めることになり、前述の希望と価値観を胸に秘めて、最善と思える選択をしながら病院のかじ取りをしてきました。自分の知識と経験を総動員して走ってきたつもりですが、地域の特性、保険診療上の制約、経済的理由などで満足できる内容とは言えないままで時間だけが過ぎ去りました。地方にあっても、中規模病院であっても、最新鋭の医療機器と、医療知識、技術で、小さくともきらりと光る病院を築きたいと願っていましたが、その道は本当に遠いのだと痛感するようになってきました。

それでも沢山の素敵な患者さんの笑顔、そしてそれを支えてくれている心優しい病院スタッフの笑顔、いつしかそのことが一番大事なことであり、それが求められている姿だと感じるようになりました。このようなことを日々の目標として、病院内にスローガンとして浸透させたいと思い、「愛される病院」をめざすことにした次第です。誰にでもわかり易い言葉かと思いますが、実現するには、きちんとした医療人としての態度、専門的知識や技術に裏打ちされた医療行為は必須です。その上で優しい心、患者さんを愛し、ひいては地域を愛する心を持つことで、「愛される病院」になれるのだと思います。さらに病院は地域の重要なインフラでもあるわけですから、警察、消防、教師などと同じような公僕としての自覚も必要だと思います。建物は新築でもありませんし、医療設備も決して最新の、最高級のものとは言えませんが、あらためて個々の患者さんを愛し、地域を愛し、同僚、スタッフを愛し、自分の働く病院を愛して、日々努めること

で、きっと日本一の「愛される病院」になれるのだと信じています。

病院長 中山 眞一



盆栽（サツキ）は上村 一孝様の作品です。玄関ロビーに飾らせていただくと、そばを通られた方は色鮮やかな紅白のサツキに魅了されていました。

◆ 副院長就任のご挨拶 ◆

皆様、こんにちは。今春から勤務しています中山剛一（なかやま 剛一）と申します。

昭和54年9月に福岡市で生まれ、大学進学後は23年間、久留米に住んでいました。42歳、3児の父です。

学生時代は専ら、硬式テニスに打ち込んでいました。スポーツ後のみんなでの1杯？ワイワイが好きな方ですが、ここ数年はコロナ蔓延のため、外食もできず、世の中の健康志向にあやかって、食生活の見直しとWalkingをおこない、10Kg以上減量しました。脂肪をおとしたところで細マッチョでも目指していこうかと思っている今日この頃です。

さて、2005年医師になってからの17年間は、久留米大学病院および久留米大学医学部外科学講座の出張関連病院で消化器外科医として勤務してきました。

良性疾患（虫垂炎・ヘルニア・胆石・消化管穿孔・気胸など）から悪性疾患（胃・大腸・肝胆膵・乳腺の癌）の手術や手術以外の治療（化学療法や緩和治療など）を担当してきました。その中でも肝臓・胆道・膵臓領域を最も得意としています。一番皆様にとって馴染みがあるのは胆石症などでしょうか。また、3月までは久留米大学高度救命救急センターで勤務し、腹膜炎例や交通外傷などの緊急手術に対応してきました。救命センターでは、科の枠を超えた幅広い範囲の疾患や現場での対応を目の当たりにしてきました。

今春からは、これらの経験を活かした診療をしていきたいと思えます。症例に応じて腹腔鏡手術も行っていますのでご相談ください。

筑豊地区においては、社会保険田川病院に3年近く勤務し、伊田・後藤寺で生活したことで、筑豊弁にも慣れ親しみました。また、ここ宮若市には、大学から宮田病院への出向という形で訪れていました。今回振り返ってみてわかったことですが、2007年から間隔をあげながらもトータル約7年間、日勤・当直業務を担当していました。そのため、2次救急の重要性を感じる場面に多々遭遇し、スタッフの支えにより当院が宮若市近郊においてその重要な一端を担っていることを現場で実感してきました。地域の医療機関の先生方と連携させていただき、地域密着型の医療の実現にお役に立てればと考えています。

今回、宮田病院に就職するにあたり、副院長としての赴任となりました。諸先輩方が多くいらっしゃる中、大役を引き受けることになり、身の引き締まる思いです。

コロナから始まり、戦争まで起こっています。少し前までは全く想像すらできなかった事態が次々に起こり、またそれにより引き起こされる社会のあり方や人の考え方やニーズの変化のスピードは目まぐるしいものがあると日々感じています。病院理念である「誠実さと温かい心で信頼される病院」は根幹ですが、加えて、これらの変化をとらえ、病院の将来に対して提案していくことが今後私に求められていることと考えています。

最後になりますが、患者さんにも当職員の方々にも、さらにたくさんの宮若スマイルがあふれる病院を目指し、皆様と共に邁進する所存です。

よろしく願いいたします。



副院長 中山 剛一



最新鋭のマンモグラフィ装置を導入しました!!

☆マンモグラフィ検査とは…?

乳房専用のX線撮影(俗にいう、レントゲン撮影)検査です。手で触れることが出来ないしこりや、悪性の可能性がある微細な石灰化(非常に細かい石の粒)など、小さな病変を写し出すことが出来るため、乳がんの早期発見に欠かすことのできない、有効な画像検査の1つです。

☆新機器の特長!!

①女性のためのデザイン

当院が導入したマンモグラフィ装置は、「一人でも多くの方に、安心して乳がん検診を受けて欲しい」という願いが込められて設計された装置です。マンモグラフィ検査は、撮影台の上に乳房をのせ、乳房専用の板で乳房全体が見やすくなるように、薄く均一に広げながら、挟んで(圧迫)固定をし、撮影をしていきます。そのため、身体が触れる装置部分の角をなくし、機械的な冷たさを感じさせないような素材、硬さを感じさせないようなデザインとなっています。

受診される皆様が、安心して検査を受けて頂けるよう努めて参ります。

②痛み軽減設計

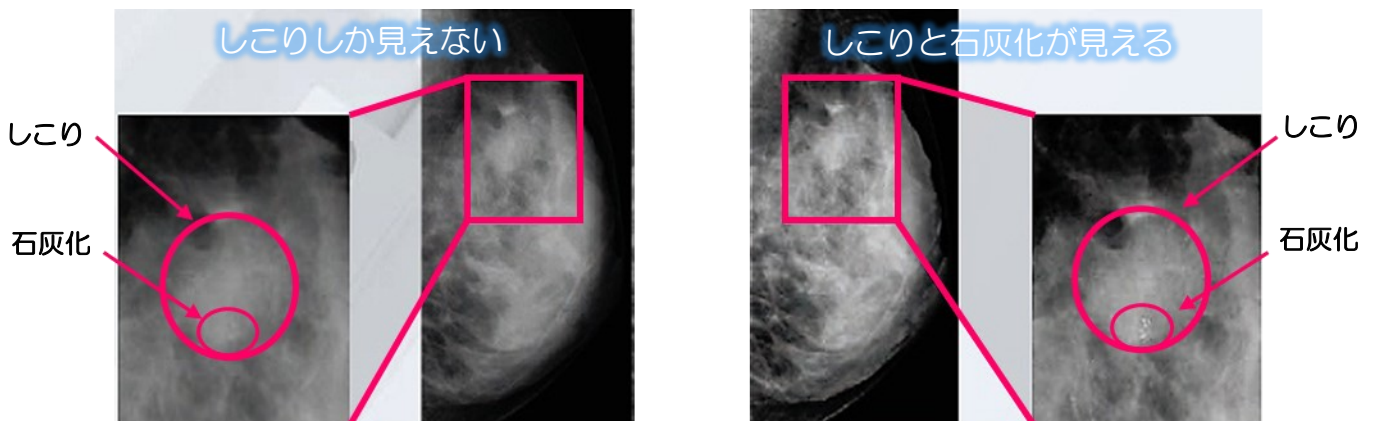
「マンモグラフィ検査は痛い」というイメージを持っている方がほとんどではないでしょうか…?今回導入した装置には、メーカー独自の痛みの少ない圧迫システムが搭載されています。圧迫板が柔軟にしなることで、受診される皆様の乳房の状態に応じて、圧迫時の圧迫圧力のスピードが適宜変化し、痛みを感じにくく、乳房全体を均一に圧迫することが可能となりました。

③高画質・高精細で診断能向上

最新鋭のデジタル画像処理技術により、今までは乳腺としこりが重なり、隠れて見えづらかった部分が、より強調して見えるようになりました。

さらに、小さな石灰化は、より精細に描出することが可能になりました。

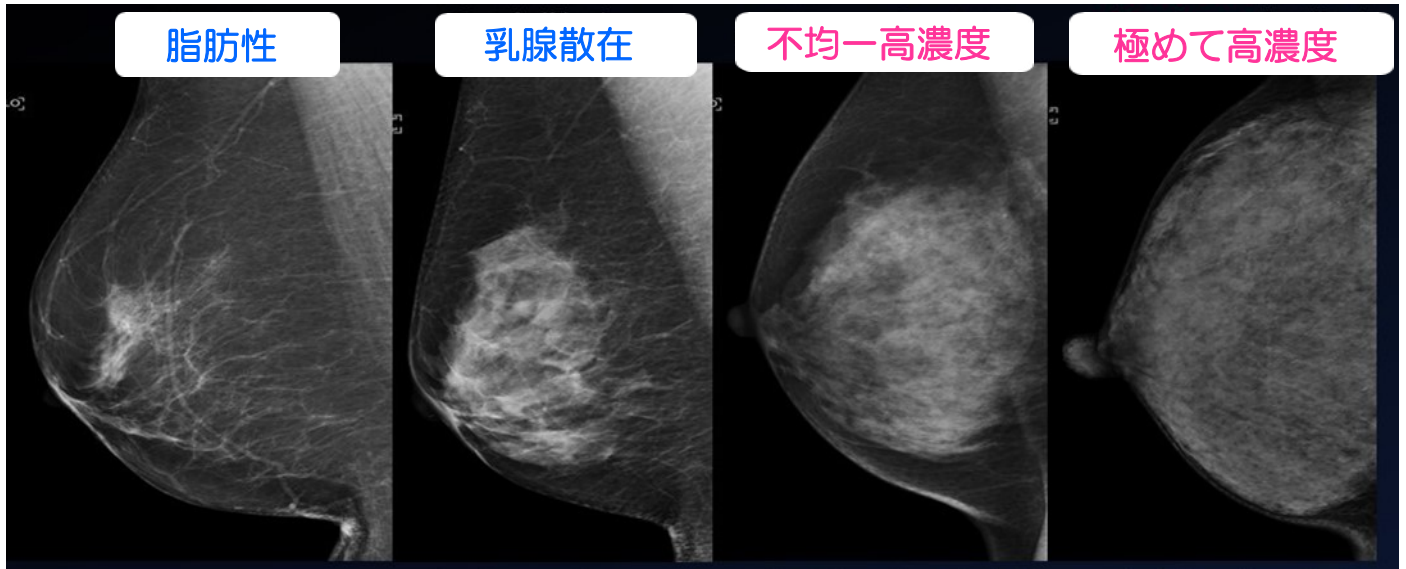
下図の赤丸のように、しこりと石灰化が強調されて見つけやすくなり、診断能が大幅に向上しました。



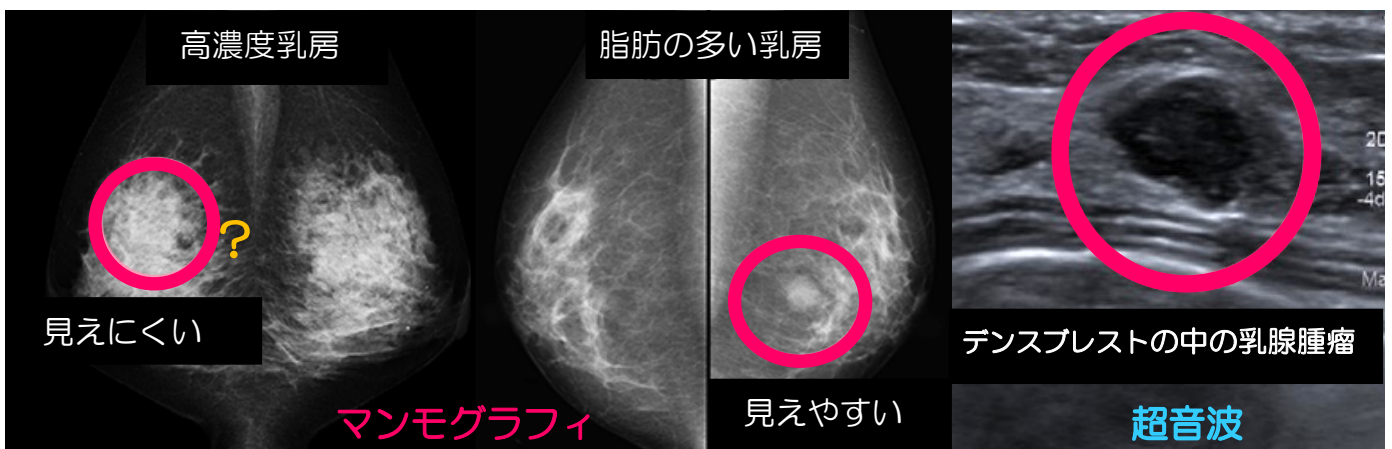
当院での乳房検査は マンモグラフィと超音波の併用を推奨しています!!

「乳房検査を受けてみたいけど、マンモグラフィ検査と超音波検査どちらを受けるといいのだろう…?」と悩んだことはないでしょうか？ 日本乳癌検診学会では、2つの検査情報を併用し、画像診断を行う総合判定（一人の医師が、マンモグラフィ検査の所見と、超音波検査の所見を総合的に判断し、しこりの状態、良悪性、どこまで進行しているかなどを判断する方）を推奨しており、どちらの検査も乳がんの発見には欠かせない有効な検査です。

乳房は、主に乳腺と脂肪からできていて、この割合は個人によって異なり、4つのタイプに分類されます。



その中でも、不均一高濃度と極めて高濃度はデンスブレスト(高濃度乳房)と言われており、アジア人女性や、50歳以下の約70%はデンスブレストとされています。マンモグラフィ検査では、乳腺実質は白く描出され、デンスブレストの方ほどその白さは強い傾向にあります。しかし、乳腺腫瘍も白く写るため乳腺の白さの程度により、本来発見しなければならない腫瘍が隠れてしまう可能性があります。超音波検査は、マンモグラフィ検査が苦手とする、デンスブレストの中にある腫瘍を見つけることを得意とし、反対に、マンモグラフィ検査は、超音波検査が苦手とする、脂肪の多い乳腺の中の腫瘍を見つけることが得意です。これらのことから、2つの検査を併用することで診断能向上が期待されます。



年々、乳がんは増加傾向にあり、女性ががんと診断される病気で一番多くなっています。その一方、早期に発見、治療をすれば治るがんとも言われています。（早期がんでは10年生存率90%以上）いかに早期で発見することが重要かわかります。当院では、日本乳癌検診学会が推奨する総合判定の仕組みを導入し、早期に乳がんが発見できるように鋭意努めております。お気軽に主治医、または放射線科までご相談ください。

放射線科医師 鳥井原 盛子
文責：放射線科 放射線技師 築地 里砂